

## はじめに



タンザニア・キリマンジャロ州における稲作

アフリカの包括的な自助努力による発展と政治安定のためには、人口の 70% が収入の半分以上を農業に依存している農村地域の存在を当然無視することは出来ない。アフリカの主食という、トウモロコシを原料としたウガリ、ソルガムやミレットによるクスクスなどを思い浮かべる人もいるだろうが、西アフリカでの稲作は 3000 年以上の歴史をもっている。また、東アフリカでも近年イネの栽培が急速に進んできている。この理由として、コメは栄養価が高く食味が良い、あるいは自給作物にも換金作物にもなり得ることなどが挙げられよう。しかし、稲の収量はアジア地域 (3-3.5ton/ha) と比較しても、アフリカ (1ton/ha 強) では非常に低い。

今日の日本のアフリカ支援は、第 4 回アフリカ開発会議 (TICAD IV) で示された、成長の加速化、人間の安全保障の確立、環境・気候変動問題への対処、という 3 つの重要分野への取り組みを中心に実施されている。このうち、農業分野における支援の中心は稲作である。この背景には、「アフリカの主要穀物 (トウモロコシ、ソルガム、小麦、コメ) のうち需要に供給が追いついていないのはコメと小麦であり、そのうちアフリカの気候条件を見るとコメの方がより生産増に適している」という現実がある。また、日本はアジア地域における稲作栽培技術支援の経験も生かせること、またアフリカ地域ではタンザニアのキリマンジャロ州などで過去 30 年にわたる技術協力の歴史があることも背景にあると思われる。

このような背景をもとに近年、サブサハラ・アフリカのコメ生産を向こう 10 年間で倍増することを目的として、アフリカ稲作振興のための共同体 (Coalition for African Rice Development: CARD) が設立された。CARD ではアフリカの諸条件に適した高収量品種であるネリカ米の普及も含め、「灌漑水田」、「天水低湿地」、「天水畑地」の 3 つの栽培システムにおける適正品種の選定、栽培技術の改善及

び必要な投入 (水、肥料等) の促進等を行うことにより、単位収量の増大を図ろうとしている。現在、CARD では支援対象国の稲作の現状を客観的に把握するための情報収集や、被支援国が実施している稲作開発戦略作成を支援しながら、被支援国の主体性を配慮した支援策の策定の取り組みが進められている。

国際耕種はこれまで多くの農業・農村開発に参画してきたが、その多くは中東、西アフリカなど乾燥地を中心とした活動であった。しかし、2006 年に開始した TBIC での研修コース (陸稲品種選定技術コース) 以後を中心に、以下に示すようなプロジェクトに参加しながらアフリカでの稲作とのつながりを持ってきた。また、陸稲品種選定技術コースでアフリカ稲作支援のための研修を実施する中、サブサハラ・アフリカの稲作を専門とする研修員との交友を深めるとともに、アフリカの稲作に関する情報を蓄積しつつある。

## 国際耕種がこれまでに関係してきたアフリカ稲作関連活動

プロジェクト名	期間	稲関連の活動
タンザニア・全国灌漑マスタープラン	2001 ~ 2003 年	稲作を主要作物とした灌漑マスタープラン計画の策定、地域レベルでの灌漑計画の支援実証
ウガンダ・ネリカ米適用化計画 / ネリカ米振興計画	2007、2008、2009 年	ウガンダ国作物資源研究所研究員の稲品種試験と品種選定、種子品種技術向上
ギニア国中部・高地ギニア持続的農村開発計画調査	2008 年 ~ 実施中	通年水利用による低投入型灌漑施設の整備、及び地域の環境に適応した作付け類型化の中での稲作栽培
陸稲品種選定技術コース	2006、2007、2008、2009 年	アフリカにおける稲品種普及の基礎となる優良品種選定に貢献出来る人材育成

この新シリーズでは、このようなアフリカ支援の動向を契機として、今後のアフリカ支援の中心課題の一つとなる稲作支援についての我々の取り組みの状況を報告したい。また、このような活動に参加することで我々なりに得てきた教訓を紹介するとともに、アフリカの稲作の課題や今後のアフリカにおける稲作栽培のあり方に我々なりの考え方を発信していきたい。

TBICにおける陸稲コース研修風景

